

研究課題名：スピノザ『エチカ』における「身体の形相」概念の内実、ならびに『エチカ』体系内での当該概念の意義についての研究

氏名：秋保 亘

1. 研究開始当初の背景

スピノザが主著『エチカ』において提示している身体・個体論は、そこに「自己組織化の連続的過程」としての有機体にかんする議論を重ねようとするヨーナス、また身体の触発性を重視し、『エチカ』を「エソロジー」（動物行動学・生態学）として読解しようとするドゥルーズ等の魅力的な展開を生んできた①。しかしこのことは、スピノザのこの議論が、多様な解釈を許容しうるほどに圧縮され、抽象的な仕方でも提示されていることの証左でもある。とりわけ、「身体の形相」の内実をなす、身体の構成諸部分の「運動と静止の一定の ratio」という概念をめぐる、スピノザ研究史上様々な解釈が提示されており、解釈の一致をみていない。

2. 研究の目的

以上の背景を踏まえ、本研究は、『エチカ』における「身体の形相」概念の内実と、『エチカ』の体系内における当該概念の位置づけ、ならびに意義を明確化することを目的とした。

3. 研究の方法

「身体の形相」は、個体としての身体を構成する諸部分間の運動と静止の一定の ratio に存するとされる。そこで本研究はまず、『エチカ』において身体・個体についてまとまった考察が提示される唯一の個所である「物体の小論」を、この小論が導入される文脈を考慮しつつ分析し、「一定の ratio」という概念の内実、「個体」の存在様式の明確化を行った。そして、この分析により得られた成果を、「物体の小論」に限られない『エチカ』のより広い文脈の中に置きなおすことで、スピノザ哲学における個体としての身体の形相、運動と静止の一定の ratio 概念の意義の解明を行った。

4. 研究成果

(1) 『エチカ』の体系において、物体・身体は、実体ではなく様態という身分を与えられる。この様態としての物体・身体のあり方を立ち入って説明することになるのが、「物体の小論」である。本研究はこの小論が、(I) 人間身体に生じるもの、すなわち「変状 affectio」を説明可能にする前提を示すこと、そして(II) 人間身体についての認識が非十全なものであることの理由の提示、以上を目指したものであることを確認した。そのうえ

で、これらの点を実際にどのように実現されるのかを明確化することを目指した。

(2) (I) について：本研究は、人間身体の変状を説明するものが、「運動と静止の一定の ratio」に他ならないことを示した。先行研究の多くは、この ratio を「割合」と捉え、個体の構成諸部分間の運動と静止の伝達を定量的に解釈しようとする②。これに対して本研究は、ratio を「関係」と捉え、その内実として、構成諸部分の運動と静止の伝達が反復的に実現されるよう規則づけることで、その諸部分から合成される個体（身体）を一定の仕方ではたらくべく条件づける、当の個体（身体）に固有の法則として理解されるべきであることを示した。そしてこの法則によって条件づけられる身体のはたらきこそが、変状の産出に他ならないことを明確化した。

(3) (II) について：身体は様態であり、つねに他の様態、すなわち諸物体・身体にとりまかれ、それらから絶えず影響を被っている。そして身体の変状は、触発される物体（身体）の本性と同時に、触発する物体の本性から生じるとされるため、身体に生じる変状の産出は、当の身体に固有の法則のみによっては説明しつくされないということになる。したがって人間は、このような仕方でも産出される変状から出発して自己自身の身体を認識するがぎり、自己の身体について非十全な認識しか持ちえないということになる。

ではこのような条件下にある人間が、身体にかんして十全な認識を獲得するとすれば、それはいかにしてか。それは、身体が可能な限り多くの事物と関係を取り結ぶことで、当の身体と他の諸物体との一致点、対立点、相違点を理解するようになるにつれ、その身体自身に生じる変状が、当の身体に固有の法則によってより多く説明されるようになりうる、ということによってであると考えられる。こうした本研究の解釈は、「一定の ratio」を或る個体・身体に固有の法則として理解することによって可能となったのである。

<引用文献>

① H. Jonas, Spinoza and the Theory of Organism, *Journal of the History of Philosophy* 3, no. 1, 1965, pp. 43-57, p. 47, G. Deleuze, *Spinoza : Philosophie pratique*, Paris, Minuit, 1981/2003, p. 40.

② 代表的なのは、M. Gueroult, *Spinoza II-L'âme*, Paris, Aubier-Montaigne, 1974, A. Matheron, *Individu et communauté chez Spinoza*, Paris, Minuit, 1968/1988.

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計 1 件)

秋保亘、スピノザの身体論—『エチカ』における「個体」と「形相」の概念を中心に、日本哲学会第 76 回大会、東京、一橋大学、2017 年 5 月。